



Bad faith : when religious belief undermines modern medicine

Paul A. Offit. -- Basic Books, 2015.

REVIEWER

医学部医学科2回生

医療を拒絶する宗教の慎重な分析

本書は、医療を拒否する宗教、宗教儀式による感染症の拡散、人工妊娠中絶の禁止、児童虐待防止運動などの象徴的な事例を分析し、信仰により現代医学の恩恵がどのように、そして、どうして拒絶されるのかを記述している。

例えば治療を拒否する宗教の代表例として、Christian Science が挙げられている。日本ではキリスト教科学と呼ばれるこの教団が成立した時代背景や教祖の個人的な治療体験が記されており、医師による治療を拒絶する教義がどのように生まれたのか、また、現代の信者が衰弱していく子供を目の前にして葛藤しつつもなぜ医療機関に行かないのか、最初の4章を読むと理解できる。筆者は他の教団の例も挙げつつ、神に従い結果として子供を見捨ててしまう行為を理解しようと、Milgram のいわゆるアイヒマン実験を持ち出してみたり、DSMの分類に従って親の精神状態を分析してみたりしておりとても興味深い。

本書の後半では、カトリック社会における人工妊娠中絶など、社会が宗教上の理由で現代医学の恩恵から患者を遠ざけている事例から出発している。聖書に記されたキリストの子供への愛と、受胎の瞬間から人として扱うというキリスト教の考え方が、西洋の児童福祉の歴史においていかに重要であったかについて触れ、中絶の禁止や医療ネグレクトがキリストの名の下に起こっている状況に対して声を上げるべきだと主張している。ここでの筆者の関心は、医療というよりは聖書の解釈の問題にある印象を受けた。医療側の改善点についての具体的な記述は乏しく、解決策を求める読者には向かない。

(裏へ続きます)

490

16

O 19

医図開架

⇒⇒⇒

本書は宗教を頭ごなしに否定せず、当事者の会話記録や当該宗教の聖典の引用などによりそれぞれの事例でどのような思考が行われたのか慎重に分析されているため、信条による診療行為拒否について考えるための非常に良い資料である。しかし、解決のために何をすべきかなどの具体的な提案はなく、問題を認識し、分析し、声をあげようという段階に留まっている。

医療と宗教の関係をじっくりと考えてみたいという人に、本書をおすすめしたい。

受理：2017-04-05